
仇。

八水 原

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仇。

【Nコード】

N 6 9 4 3 A

【作者名】

八水 原

【あらすじ】

気付けばそこは地獄だった。いつも一緒に居て、バカばかりやってた友達も、今じゃただの塊。何があったか理解できたもんじゃない。意識が遠のく中、目を凝らし、状況を把握しようと必死だった。

#00 前夜（前書き）

流血系がダメな方は見ないほうがいいかもしれません（^ー^）
一応ジャンルは学園モノ？

#00・前夜

路地裏に佇む人影。

数十年も前に見る写真のような、セピア色の髪。

何かを見下ろすその虚ろな目は、何かをやり遂げて落ち着いているような目。白い制服姿ではあるが、その白い布地には、どす黒く、赤い模様がついている。

不規則に散らばったその花は、服だけでなく、壁や地面、落ちているタバコの吸い殻にさえも反映していた。

返り血。

不似合いなその姿が手に持つ物。路地裏の闇に包まれながらも、妖しく光る。

刀。

なぜこんな少女が、刀を？

その理由を考える暇も与えられず、俺の目の前は赤く染まっていた。

最後の力をふり絞り、両手について立とうとする。

地面に手をつく事は出来なかった。

そうだ、俺に腕は無かったんだっけ…。ついさっき失ったんだよな。なんでこんな事になったんだろう…

復讐。

俺の脳裏に光る二文字。

復讐？俺が復讐をするのか、されてるのか。
よく分からないな…

#00・前夜（後書き）

初投稿の力無き物語の前触れでした。笑 えっと、一応本編は学園系の流血沙汰な雰囲気かもち出す予定ですが、少々暴力な感じになるかもしれません あー、結局は独り言になるんですよね、ここ（笑 感想とか貰えたらやる気です（笑）

#01・変わらない流れ

わずかに開いたカーテンから差し込む光。どこか柔らかく、いつまでも見ていたくなるようなもの。その光は、都合よく俺の顔を覆っている。

朝だ。

うーん、と小さく唸ると、右手をベッドの下へ伸ばし、何かの手触りを感じる。

まだ鳴っていない目覚まし時計。デジタル表示で、6:32を表している。いや、5:32...?

デジタルの短所はこれだ。電池が無くなってくれば、すっかり力が無くなって時間をハッキリと教えてくれない。

5か6か。

ダイスの目は6と出た。6マス先にあるイベントマス。

『一回休み』

やがて俺は、今日が日曜日、即ち休日の午前6:32であることに気付いた。

正確にはコレ、4分遅れてるんだけどさ。

機械ってそんなモンだろう？もう何年もこの時計を睨み続けてきた。8年...いや、9年？

ダイスの目は8と出た。俺の短所はこれだ、すぐに何でも忘れちゃう。まだ17歳の学生だったのに、ボケてきたかな？

俺は欠伸をしながら目を擦り、上体を起こしてやった。

「ああ…眠い…」

休日に限って早く目が覚めるのは皆そうだろう？

欠伸混じりの俺の声は、授業中に聞こえてくるヒソヒソとした声のようだった。 あいつら、周りに聞こえてないとも思ってたのか？

逆に聞こえてしまう上に、聞きたくなるんだよ。その上、大抵が他人の悪口だ。聞いているとイライラする。

『さ』行が特に聞こえる、嫌な具合に。

それから一言も口にせず、ベッドから降りた。

黄緑色のカーペットは硬く、踏み慣れた環境。

そのままゆっくりと窓際へ向かう。差し込む光に照らされた宙を舞う塵は、窓の外へ出たそうにウズウズしてる様子だった。半開きのカーテンを開け、そのまま窓を開ける。1m幅の小さな窓。マメに掃除してたから、汚れは目立たない。その代わりに、左下。縁の方からヒビが入ってて、かなり目立ってる。

カーテン、窓を開けて朝の日差しを浴びる。

誰しも一度は憧れた朝の迎え方だろうな。俺の部屋からだ毎朝味わえるぜ。羨ましいか？

外から入り込む風を浴びながら、前寄りになってる体を支えている両腕を見る。日差しのせいで金色に輝いて見えた。まるで金箔ベタ張り。

小さく息をついた後、部屋に飛び込んだノックに気付く。

俺が振り返ると同時にドアが開き、見慣れた顔が小さく覗きこむ。

「あ…珍しく今日は早いんだね」

ああ、と俺が言う。

おかしいな、この流れは…

「今日ね、お父さん仕事だから、コウジの面倒見とけって言われたの」

…言つとくけど、コイツは俺の妹だ。

…名前？そんならどうだつていいだろ。とにかく、面倒見られるのはコイツだ。俺は兄、コイツは妹。上と下だ。

ちなみに俺の名前は浩治。たまに名前書く時、浩浩つて書いてしまう場合がある。ややこしいよ、全く。

「…で、その面倒見役が用事でも？」

「うつん、ただ、何してるかなーって…」

妹は下を向き、小さめの声でそう言った。

やっぱりこの流れは。

「なあ」

唐突に口を開いた俺に、少しビクつとした感じで、妹は顔をあげた。

「なに？」

「お湯、沸騰してるんじゃないか？」

キョトンとした表情だったが、急にハツとなり、ドアを閉じ駆けてゆく。

沸騰。

しばらくすると妹が戻ってきた。

「すごいね、兄。なんで沸騰してるって分かったの？」

…やはり。

腕を組み、横を向く。

「今日何日？」

妹の問い掛けに答えず、質問を質問で返し、カレンダーを睨みつける俺。

「8日。5月のね」

…このカレンダーを見るのは、毎日。毎朝。毎晩。日課だ。

その日の日付だって覚えてる。カレンダーが好きって訳じゃないけどな。

で、俺の記憶が正しければ。最後に日付を確認したのは。

5月13日。

そう。

5日後だ。13日に何があったかさえも覚えて……

日付を確認して、学校に行つて。13日の金曜日つてことで盛り上がつて。学校帰りに寄り道して。

ねえ、どうかしたの？

それから……

ねえつてば、兄。

それから……

おい？

「ん……何？」

人が考え事してる時に話かけるなよ……

「さつきから何か悩んでるみたいだよ？ なにかあつた？」

俺はなるべく気にさせないような口調で言つた。

「ああ、別に何も無いよ。それより、腹減つたな」

#01・変わらない流れ（後書き）

2話目になりますね。 なんか文章が自分の性格丸出しなんです
が…（笑 完結できるまで、仲良く（？）してもらえると幸いです
です・

#02・或いは、過去

俺が振り返ると同時にドアが開き、見慣れた顔が小さく覗きこむ。

「あ…珍しく今日は早いだね」

ああ、と俺が言う。まだ寝ぼけているような声に、その顔は微笑した。

「今日ね、お父さん仕事だから、コウジの面倒見とけて言われたの」

…言つとくけど、コイツは俺の妹だ。

…名前？そんならどうだっていいだろ。とにかく、面倒見られるのはコイツだ。俺は兄、コイツは妹。上と下だ。

ちなみに俺の名前は浩治。たまに名前書く時、浩浩って書いてしまう場合がある。ややこしいよ、全く。

「…で、その面倒見役が用事でも？」

「ううん、ただ、何してるかなーって…」

妹は下を向き、小さく呟いた。

実はこの妹、兄である俺に気があるらしい。冗談じゃないよ、俺はコイツのハッキリとしない性格はあまり好きじゃない。弱いというか…

「あ…でも何で今日は早かったの？」

俺が知る訳がない。最初から起きようとも思ってたんだし。

「んや…なんでだろうね…」

ううん、と俺が背伸びをしながら答えると、妹は、何やら気に食わなさそうな顔をした。

「彼女とデート…とか？」

彼女。俺には全く縁のない言葉だ。その理由は妹にある…詳しく言わなくてもいいだろ？

「ねーよ」

「そ。わかった」

安堵の息を漏らす妹。

飾り気のない、肩下まで伸びた黒い髪。母親似の綺麗な二重。そのパーツが組まれた小顔には、親父の面影はなかった。どこを取っても母親似。

「…？」

何か臭いがしたのか、妹はあたりを見回し始めた。クンクン、というような仕草だ。

「ああーっ！！」

驚いた。長年の付き合いだが、これ程までに急なものは初めてだ。暗闇からクラッカーを鳴らされたような気分。

「どうした？」

俺の質問に答えることなく、妹は部屋を飛び出していった。

「火、点けっ放しだったああっ！！！！」

「兄？」

妹が顔を覗きこんできた。

ハッとなり、俺は辺りを見る。よく掃除されたフローリングの部屋に、ガラス製のテーブル。このテーブルはもう古いが、奇跡的にヒビは一つも入っていない。昔から見慣れてきたテーブルだ。

その上には、よく磨かれた純白の皿。綺麗好きなのは妹で、そこも母親似だった。

いい匂いを放つ物が一つ。

「さっきから変だよ…？兄…」

心配そうな表情。

俺が黙ったまま居ると、頬を突っ突いてくる。

「早く食べないと、冷えちゃうよ」

うん。と呟くと、皿の上にある目玉焼きに箸を。

妹は小さく首を傾げると、キッチンへ戻った。湯気のたつ目玉焼きから目を離し、妹を見る。

鼻歌を口ずさみながら、沸いたお湯をカップに注ぐ姿。俺の視線に気付いたのか、一旦手を止め、こっちを向く。

「もうすぐで火事になってたかも。ありがとね、兄」

今日、キッチン燃えてたんだよな。本当なら。

朝食を済ませた後、暇になった俺は、再び部屋に戻った。勿論、自分の食器は自分で洗ったさ。

「間違いない：5日前だ」

5日後：つまり13日。その日までを、俺は確かに経過させている。経過させたし、その中に居た。

今日、妹がすっかり小火起こしてしまうことも分かっていた。これをどう説明しようか？

デジャヴってやつか？

或いは、予知？

違うな。

『巻き戻った』んだ。

#02・或いは、過去（後書き）

はい、一人でテンション上がっちゃってます（笑 読んでくれる
人居るのかなあ… 一話一話が短い；

#03・新規メモリ（前書き）

勝手にテンション上がって書いてます（笑
続きますかな？笑

これがいつまで

#03・新規メモリ

机の上に何の考えもなく置かれた、リモコン。巻き戻し、という文字が目に入った。

この先5日間の記憶。今日の夜食った飯だって覚えている。妹が作った飯はうまいからな…

一体俺はどうしたんだ？

今、限り無く理解不可な状況に陥っている。これについて考えることは、昔起きたことを思い出すようだった。走馬灯のよう。

テレビに、1時を回った事を知らされた。

考えても仕方あるまい、5日後に何か分かるはずだ。

俺の一年は375日。

それでいい。

生憎、難しい事を考えれる脳の持ち主じゃないんでね。

さあて…今からどうしよう。

と、考えるのをやめた時、ベッドの頭もとに置いてあった携帯がなかった。

「……………」

俺は黙ってそれを手にとり、発信者名を見た。

「090……………」

見覚えのない番号だった。

通話、と示されたボタンに親指を乗せたまま、しばらく黙る。

切れる気配はなかった。

俺は緑に光り、アピールしきっているボタンを押し、小さな穴を耳元へ。

携帯って…

便利だよなあ。

「もしもし」

と、声を出したのは俺ではなく、相手が先だった。慌ててこちらも口を。

おかしいな…あの時は電話なんて…？

「も…もしもし？」

「窓から外を見るんだ」

女の声…？いや、どこかがおかしい…変声機か？

「え？」

「いいから窓から外を見るんだ」

何のことだ？いきなりそうわれちゃっても参る。頭の中、整理させるよ。

「早く」

声に急かされて、俺は仕方なく窓から顔を出した。従わねばならぬ気がしたのだ。よくわからないが、そう感じた。

俺から見て左、商店街から突き抜けた交差点の下。ミラーの影に人がいる。

赤いニット帽を被り、黒いジャケットとジーパン。なんて服装だ…ギヤングかなんかか？

「あれ…アンタか？誰なんだよ」

「残念ながら私じゃない。ただ、その男に気をつけなさい………」
そう言っと、ブツツという音をたて、通話が終わった。

2分17。

一度目の今日には、こんな電話はなかった。
二度目の今日に、初めて掛かってきた電話だ。

その時は気付かなかったが、携帯を握り窓に背を向けた俺の手は、微かだが、震えていた。

気をつける。

何をどう気をつければいいんだ？

急に携帯が鳴り、誰かもわからない奴に指示された。
意味わからねえ。

どうせイタズラだろ。俺もよくやってた。じゃんけんで負けた奴が、自分の携帯から適当な番号にかけ、なぞのセリフを残すという、今思えばなんてガキじみた遊びだったんだろうか。

俺は体の震えに気付くことなく、部屋を出た。頭の中には何も考えられてなかった。

「あれ、兄。寝てたの？」

ソファーに座り、テレビを眺めていた妹がいった。

テレビでは『痩せるブロッコリー』という話題を取り上げた番組があっていた。ブロッコリーが痩せるのか？

「ああ…二度寝してた」

「で、やっぱり今日どっか行くの？」

「本屋行ってくる。すぐ帰るよ」

ジーッと俺を見ながら、ふーん、と呟く妹。

そんな視線を背に感じながら、俺は玄関へ向かった。
見慣れた場所、踏み慣れた靴。

靴紐の長さが左右で一致しないが、気にしない。
いつてきまーす、と小さく呟き、太陽の光が差し込む世界へ歩き出した。

一度送った日々、これとまた違う日々を改めるのも楽しいだろう。

ゆっくり踏み出す、右、左。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6943a/>

仇。

2011年1月6日02時07分発行